

堤中納言物語伝本考(二)

松村 誠 一

(高知大学文学部 國語学國文学研究室)

前回* は第二群第一類と第三類第二種とについて述べたが、今回は第二類についての考察を試みることにしよう。

第二群第二類の諸本

- (1) 国立国会図書館支部上野図書館蔵十冊本(以下上野図書館本と称す。)

縦8寸5分、横6寸3分、袋綴十冊。現在は五篇ずつまとめて上下二冊にしてある。「東京図書館蔵」「榊原家蔵」「故榊原芳埜納本」等の蔵書印がある。「むしめつるひめ君」「おもはぬかたにとまりする少將」の二冊は、他の八冊と比較して料紙も筆蹟も異なり、また本文を検討するに第一群第一類第一種に属すると考えられる補寫である。

- (2) 大島雅太郎氏舊藏島原本(以下島原本と称す。)

本書は原本を見る機会がなく、池田亀鑑博士の作成された影寫本によつた。

- (3) 尊経閣文庫蔵元祿本(以下元祿本と称す。)

縦8寸7分、横6寸1分、袋綴一冊。大野木克豊氏の調査によれば、元祿頃の書寫かという。

- (4) 京都大学国文学研究室蔵本

本書は原本によらず、マイクロフィルムによつた。本来は十冊本であるが、「ほどほどの懸想」を欠いている。

- (5) 広島大学附属図書館蔵本(以下広島大学本と称す。)

本書は原本によらず、古典文庫本** によつた。同書の松尾聰氏の解説によると「美濃紙半折大の十冊本」で、浅野侯府家舊藏である。

- (6) 宮内庁書陵部蔵桂宮舊藏本(以下書陵部本と称す。)

本書は原本によらず、マイクロフィルムによつた。「図書寮典籍解題 文学篇***」の記述によれば「27.8釐×20.3釐、袋綴」の十冊本である。

- (7) 天理図書館蔵佐佐木信綱博士舊藏明治奥書本(以下明治本と称す。)

縦9寸2分、横6寸5分、袋綴一冊。ただし、本来は十冊であつたものを改裝したものである。九三ウに朱で次の奥書がある。

明治十五年八月立秋前五日以仲父匱齋君所手寫本一校了 岡本嶺****

本書も大体この第二類に属するものと考えられるが、本稿においては省略した。

第二類の諸本の共通異文

上野図書館本・島原本・元祿本・京大国文学研究室本・広島大学本・書陵部本を比較して、その共通異文をあげると、次の如くである。異文の箇所は、下に一線を施し、頁数は拙著堤中納言物語(日本古典全書)***** による。例文は上野図書館本で代表させてある。

* 松村誠一 堤中納言物語傳本考(一) 高知大学学術研究報告 第1巻第2号 昭和27年6月

** 松尾 聰校訂 堤中納言物語 古典文庫 昭和23年3月

*** 宮内府図書寮編 図書寮典籍解題 文学篇 国立書院 昭和23年10月

**** この文字、佐佐木信綱博士編 竹柏園蔵書志(巖松堂 昭和14年1月)に「宣(花押)」とある。

***** 松村誠一 堤中納言物語 朝日新聞社 昭和26年12月

番号	共通異文	頁
1	たゝかしこのそけととかむる人なし	35
2	上の御にほひいとしるくなといふほとに	41
3	いみしうしたふかうつくしうときは	42
4	きぬとて人ゝのきるも	47
5	かはむしならへてふといふと云人ありなむや	48
6	わらはへのあこめはかまきよけにて	55
7	梅かえにふかくそたのむ	55
8	さらに今はさやうの事もおほしの給はせすところきけはといふ	57
9	いまやうは中はしめのをそし給なるなとそわらひてもとかす	58
10	秋のゆふへにもをとらぬ風に	59
11	この姫君とうへとの御かたのひめきみとかひあはせさせたまはんとて	63
12	ものゝふたにいれなとしてももちちかひさはく中也のすたれに	69
13	としのつもりけるほともあはれにおもひしられけん	74
14	御ふみなと侍ねはいかなる事にか	79
15	たたおなしさまなる御ころのうちとのみそ心くるしうとそ	82
16	いけのはちすの露はたまとそみゆるといへはまつに	83
17	あはれとの給はせよなといへはいかにあらんたえていらへもせぬほとに	88
18	この人にはかゝるいとなかり	90
19	また人のとりて書うつしたれあやしくもあるかな	90
20	いへにすへたる人こそやことなくおもふにあらめなといふも	91
21	やまさとにひともありかねは	95
22	すみなれし宿をみすてゝ行月の影にをとせてこふるわさかな	96
23	せめてはならはぬのゝやれあをにても	102
24	かけたかねの松のみ	103
25	なみうちよせしこゑに	104

(附記) 異文 4・5・13・14・15 は、上野図書館本が補寫の部分であるから、これを除外して、島原本で代表させてある。また、異文 6・7・8・9 は、京大国文学研究室本の欠けている部分であるから、これを含んでいない。

第二類の諸本の相互関係

上述の如く、第二類の諸本は多くの共通異文を有し、同一の系統と考えることができるが、これら諸本の各々の間の関係はどうであろうか。

本文の異同を検討すると、上述の六本のうち、上野図書館本と島原本、元祿本と京大国文学研究室本、広島大学本と書陵部本は、それぞれ近い関係にあることが明かにされる。

まず、上野図書館本と島原本とは、次の如き共通異文を有する、例文は上野図書館本によつて示す。

番号	共 通 異 文	頁
1	まきははしく人にしのふにやと	44
2	なを〈けちにいふめれは	44
3	ひとすちにおもひもよらぬあをやきは風よつけつゝさそみたるらん	58
4	またせ給ふなとそゝのかし聞ゆれば	59
5	ことふえなとちらして	59
6	てん上にかひにやりきたらて	60
7	しはしまちきこゆるにおはすなりぬれば	65
8	うちをば思ひよらぬそ心はをくれたりける	65
9	いまよりいとまなくてそゝきはんへるそゝさへつりかけて	68
10	ひとかたり給はゝはゝもこそそのたまへと	69
11	ようなきことはいひてこのわたりをやみあらはさんと	72
12	しをんいろのうちきうすいろのをひきかけたるは	83
13	にしの御かたそつのみやのうへは	85
14	よのなかにもものあはれしり給らん人は	104

元祿本と京大国文学研究室本とは、次の如き共通異文を有する。例文は元祿本によつて示す。

番号	共 通 異 文	頁
1	わかき人〈やかて心みせ給て	41
2	おさなき人のはへりしして	45
3	うちわなゝかしかはしかやうに	50
4	いとおかしき物かなとこれ御らんせよとて	51
5	いつかたにもよからむとおほしめす	60
6	中納言うしろみ給はとはたけなり	62
7	中納言かうちとけ心にいれてひきたまへるおりは	63
8	とをばかりなるおのこくちはのかりきぬ	69
9	すゝりのはこよりはみをとるたるしたんのはこの	70
10	いかにとくまいりなん	87
11	心さしはかりかはらねと	92
12	のこるへうもなければ心くるしうおもひ〈	94
13	女のちゝはゝかくきたるときゝてきたるに	98
14	はや出給ぬといへばあさましくなこりなき御心かなとて	98

広島大学本と書陵部本とは、次の如き共通異文を有する。例文は広島大学本によって示す。

番号	共 通 異 文	頁
1	なをし <u>せ</u> ちにいふめれは	44
2	いとそか <u>し</u> きやとこれをもはつかしとおほしたり	47
3	むくつ <u>て</u> なるかはむしをけうすなると	47
4	いともそ <u>て</u> にあたになりぬるをや	47
5	もやのすたれをすこしまきあけて <u>きて</u> そういてたてゝ	47
6	このむしともと <u>ふ</u> らるはらはへ	49
7	れいのやう <u>なり</u> はわひしとて	49
8	かしこかりほめ給ときゝ <u>て</u> したりなめり	50
9	はたをりめの <u>こ</u> くちきひとかさね	52
10	そのかよふ <u>躰</u> とゝ <u>ろ</u> はいつくそ	57
11	たたいま <u>い</u> らせたまへとて	59
12	またき <u>す</u> いとましけなるを	61
13	さらは <u>と</u> てし給へかし	61
14	ゆかしうおほしめさるゝ <u>れ</u> は	62
15	はしつかたにても <u>す</u> ませたまへかし	65
16	いまよりいとまなくてそゝきはむへる <u>を</u> さへつりかけて	68
17	<u>みて</u> のうち	75
18	<u>何</u> 事いと心うく人め稀なる	75
19	あなかにいさなひ給 <u>つ</u> れはつせへまいりたりつる程の	76
20	右大臣の <u>中</u> 將の御めのとこのさるものせう	76
21	このしのひ給ふ <u>御</u> 事をも	77
22	しかくときこえてすゝめたてまつ <u>れ</u> と	79
23	こき殿はをはしませは <u>君</u> せんえう殿は	84
24	みな人く <u>す</u> わらう	86
25	よろつ心ほそくもおほゆる <u>を</u>	87
26	みなねいりぬるけはひをきゝ <u>つ</u> ゝ	87
27	殿はら宮はら女御たちの御もと <u>い</u> ひとりつゝまいらせ	88
28	よしなしことゝともかきつくるなり	104

藤田徳太郎氏は、上野図書館本について「図書館の飛鳥井本と全く同じ本」であるとし、「恐らく図書館の飛鳥井本より転寫したものであらう」* といわれた。上述の共通異文の比較によれば、

* 藤田徳太郎 堤中納物語研究 新潮社 昭和2年7月 日本文学講座 第8巻

むしろ上野図書館本と島原本との間にそういった関係が推定され、また広島大学本と書陵部本(藤田氏のいう飛鳥井本)との間にも同様の関係の存在が考えられるが、上野図書館本と書陵部本との間には、藤田氏のいわれるほどの関係は考えられない。

京大国文学研究室本についても、藤田氏は「恐らく、図書寮本より出でたものであらう**」といわれるが、これもむしろ元祿本との間に密接な関係があると考えの方が妥当であることはいうまでもない。

結 語

かくの如く、上述の諸本は同一の共通異文を有する同一類の本文を有し、さらにその中に、上野図書館本と島原本、元祿本と京大国文学研究室本、広島大学本と書陵部本の三種があるものと考えられる。第二類の共通異文の外に、この類の特徴と考えられるものが一つある。それは、「はなたの女御」の中の、「世の中のうきをしらぬと思ひしにこはひにものはなけかしきかな」の歌の「こ」の右傍に、上野図書館本・島原本・元祿本・京大国文学研究室本・書陵部本および明治本は、「に歟本不分明イ」と記されていることである。これも前記共通異文とあわせて、注意すべき点である。

(追記) この類に属するものとして、以上の外に黒川真頼舊藏本があるが、これについては別の機会に詳細に記述するであろう。

なお本稿を草するに当たり、マイクロフィルム の作成を許可せられた 国立国会図書館・尊経閣文庫・京都大学附属図書館・宮内庁書陵部に謝意を表する。また、黒川真頼舊藏本については、池田亀鑑博士の御指導にあつく感謝する次第である。

堤中納言物語諸本分類表

第一 群

第一 類

第一 種

東京大学附属図書館蔵南葵文庫舊藏本
国立国会図書館支部静嘉堂文庫蔵松井簡治博士舊藏函崎文庫本
東北大学附属図書館蔵狩野文庫本
舊群馬師範学校蔵本

第二 種

無窮会神習文庫蔵清水浜臣舊藏本
無窮会神習文庫蔵井上頼旧舊藏本
宮内庁書陵部蔵清水浜臣本
国立国会図書館支部上野図書館蔵清水浜臣本

第二 類

久原文庫蔵大野廣城標註本
国立国会図書館支部静嘉堂文庫蔵松井簡治博士舊藏大野廣城本
国立国会図書館支部内閣文庫蔵本
京都大学附属図書館蔵伴信友校本
国立国会図書館支部静嘉堂文庫蔵山田常典本

第三 類

神宮文庫蔵林崎文庫舊藏本

清水泰氏藏藤井乙男博士舊藏一冊本

第 二 群

第 一 類

三手文庫藏本

神宮文庫藏大愚校本

第 二 類

国立国会図書館支部上野図書館藏十冊本

補寫された「虫めづる姫君」「思はぬ方にとまりする少將」は第一群第一類第一種に属する本文を有するから除外する。

池田亀鑑博士藏黒川眞頼舊藏本

大島雅太郎氏藏島原本

尊経閣文庫藏元祿本

京都大学国文学研究室藏本

広島大学附属図書館（舊広島師範学校）藏浅野家舊藏本

宮内庁書陵部藏桂宮舊藏本

天理図書館藏佐佐木信綱博士舊藏明治十五年奥書本

第 三 類

第 一 種

尊経閣文庫藏天和本

久原文庫藏阿波国文庫舊藏本

国立国会図書館支部靜嘉堂文庫藏松井簡治博士舊藏尙古文庫本

国立国会図書館支部靜嘉堂文庫藏松井簡治博士舊藏富士谷御枕本

岡山大学附属図書館藏池田家舊藏土肥経平舊藏本

天理図書館藏佐佐木信綱博士舊藏尾崎雅嘉自筆本

第 二 種

東京教育大学附属図書館藏横山由清舊藏本

国立国会図書館支部靜嘉堂文庫藏松井簡治博士舊藏横山由清校本

池田亀鑑博士藏本

久原文庫藏萩原宗固自筆本

日本大学附属図書館藏本

第 三 群

刈谷町立図書館藏村上文庫舊藏本

石川県立図書館藏李花亭文庫舊藏本

清水泰氏藏藤井乙男博士舊藏二冊本

京都大学吉田分校（舊三高）藏本

第一群 第一類第二種と第二群第三類第二種との混態

国立国会図書館支部靜嘉堂文庫藏松井簡治博士舊藏日尾荆山本

（昭和29年10月30日受理）

第二類諸本共通異文

番号

上野図書館本

元

祿

本

書

陵

部

本

1

キョーニシキ

キョーニシキ

キョーニシキ

2

ヨレハミ

ヨレハミ

ヨレハミ

10

秋のゆき

秋のゆき

秋のゆき

12

さくす

さくす

さくす

16

まじり

まじり

まじり

17

うさぎ

うさぎ

うさぎ

21

お

お

お

24

かき

かき

かき

25

うさぎ

うさぎ

うさぎ

